ナ。合點か情をかくれば恨むるぞと。地口は立派にいひなせど。ッシ心は頼む詞の色。地上使は見ぬ顔開かぬ顔。早お暇と座を立てば。詞最早お出なさるゝか先づ以て今日は御苦勞千萬。イヤサ貴殿にも子息の儀に就きお心遣ひ。イヤもう其儀は御沙汰なし。成程々々。地御内證へも宜しくお頼み存ずると。挨拶すれば佐賀右衛門。詞アヽ御亭主段々の御馳走忝い。お禮は重ねて急度申さう。地〳〵と歪む大鳥直なる主計。いはねどそれとしらすの發護割竹打立て立ちかゝり。引立つれば園七も屠所の羊に引代へて。命助かり廻り合ひ。親子の絆縛繩引かれ。出づるぞ 三蓮へ惠ある

第三　出入の數をつまぐつた　珠數三昧の男作

地住吉のハルフシ濱邊を春の。名に高き。そればかりでは並木の蔭。新家の貴賓髪結床。櫛の齒をひく往來も自由な堺海道を。大坂の方からひよこ〳〵と來るは撥鬢糟毛の親仁。釣船の三ぶとては。人の厭がるぶら〳〵も。年が意見で直つたか。片手には珠數片手には。だつまの樣な小ぢよつぽがオクリ冗談歩き持てあぐむ。母のおかちが付添うて。ッシ道々機嫌鳥居前。詞マア市ちつと爰で休みや。三ぶ樣も休ましやんせ。ヲヽサテ此坊主はよう歩いたの。大方天下茶屋邊で慥かに駄々けうと思うて。廿五文が駕籠相輿で振舞ふ所を。三文が地黄煎玉でまじなうた。昨日此方が戻つて。今日園七が牢から出ると聞いた故。嬉しうて夜が寐られず。夜の明けるを待ち兼ねた。コリヤ坊主。追つ付け父に逢はしてやらう。イヤしたがもつと隙がいらう。祝うて明神樣へお禮がてら。連れて參らしやれんかい。間違のない樣におりや爰に待つて居よ。ほんに三ぶ樣こちの園七殿念頃な中ぢやとて。いかい世話でござんす。何のいのしたが言ふぢやないが此方の親父。三河屋の義平次が迎ひに來て遣りやる筈。今日は又なぜ來ぬの。今朝から腰が痛いと言うて。サア〳〵サア〳〵作病ぢやて。殊に直にも無い和郎ぢやもの。こんな事誰も來とむながる。マ參つてござれ。アイそんならさう致しませう。コレがんがへ參つて來やんしよと地いやいのと。ロうつしいふ鸚鵡の鳥。親子は宮へ三ぶは火打石に腰かけすつぽ〳〵。ッシ茶の錢始末と見えにける。詞ハイ〳〵〳〵賴みませう。杖せんか。地ヲ大小路のあたりから持つて來て。息杖の先にぶらりと駕籠突張り。詞旦那申し。後の立場の駕籠と代へます錢やつて下はんせと。地願へば垂の内よりも。詞極めたは大坂迄着けてから先で渡さう。イヤサそれぢやちと

勝手がわるこんす。後の駕籠と代へねばならぬ。どうぢやあろと爰でやつて下さりませ。サアやる事は易けれど。錢を爰に持合さぬ。大坂で慥に渡す。ハア相棒聞いたか。勿怪なものぢやな。イヤ受取らにや勝手が悪いが。大坂は何處へ着けるのぢやナ。長町邊で尋ねたらば。ムウ先は知れぬのでござりますか。イヤモそんならいよ〳〵爰で渡して下さりませ。ハテ執拗い爰には錢がないといふのに。ムウそんならおいらを衒るのかと地ッシいがみかくれば。詞アヽコリヤ麁相いふな。武士に向つてヤどこへ武士。有様は丸腰エイそれで衒の手め上げた。こんな奴はヤアかうせいと。地思ひ合つたる悪者同士。駕籠をくるりと打返され。内より出たは礒之丞。落ちたるはずみに膝摺り剝き。くわつとせく氣も身の恥をハルッシさしうつ。むいて怺へるる。詞コリヤ棒組。何でなと爰迄の駕籠代。算用して取つてしまへ。下著なりと上著なりと。地手繰つて算用濟まさうと ッシ立ちかゝらんとする所を。詞コリヤ〳〵〳〵減多な事して。後悔すなと地横合から三ぶが聲。詞ヤ何も知らいでそこな親爺何いはるぞい。ホホ知つてゐる〳〵。コリヤいがむなやい〳〵。サア足元の明い中にとつ走らいで。なこな様若いがア溫順しいよう堪忍さつしやるぞ。シテ駕籠代は何ぼの極め。直なしたは二百五十か。でも高い駕籠ぢやの。からしやつたこな様もこな様ぢやて。由縁かゝりはなけれどもコレ此親父がヲ尻持。ヤアわり様が尻持つか。ヲ此釣船の三ぶが尻持つた達引。此珠數で數へて見りや。丁度九百九十九出入ある。前なら汝疊んで仕舞ひ。千人投の數に合すけれど。地堪忍して去なしてやると。啖切る顏をじろりとながめ。詞ホヽ釣船面白い。どうして去なしやる。地サア見ようと。摑みかゝるを身をかはし。ころりと投げたは百の錢。高い極めは此方の損。了簡して半分やる。此格でいがんだら大きな目に逢ひをろと。丸う捌いた男作。美しいので氣味悪く錢受取るも怖々に。尻こそばうて雲助は ッシ駕籠引つかたげ歸りける。地礒之丞は靜々と。三ぶに一禮。詞狼藉者に出合ひ難儀の所。其許のお世話にて事なく納まり大慶致す。只今拙者流浪の身。時を得てお禮を申す爲なれば。お在所は何所承りたい。イヤさうあつては此親父所は申さぬ。長町邊とある故に。わしもちよつちよとあのあたりへ行きます者。長町は何町目。イヤ何町目かは存ぜねど。三河屋の義平次を尋ねて參る者。ムウあの義平次に用があるとは。テモ變つた者にお近付ぢやの。イヤ近付ではござらねど其娘のおかち。

ヘエ。そんならおまへはてつきり。磯之丞様とやらでござりますか。とは又よく御存じ。サアかうでごんす。今日團七が出牢迎ひにおかちと息子と。わしが連れて來てやりました。道々お前の話聞きましてお笑止に存じますが。團七がよい様にしませうぞ氣遣ひをさしやますな。おかちは宮へ參られたが戻りの遲いは。エイてつきりとコリヤ坊主がだゝけて新家の晝食。あつちやから行て昆布屋に居ましよ。三ぶに聞いたと言はしやませ。是は重疊。昨日は堺で日を暮し。今日は大坂へ參る所。よい所で其許のお目にかゝり。アヽ其挨拶もゆるりと〳〵。マアちやつちやと行かしやませ。地然らば後程御意得んと。フシ昆布屋をさして急ぎ行く。詞アあの人よい所で俺に逢うたぞ。イヤ逢うたは逢うたが此團七。もう來さうな者ではある。地髮で問ふと暖簾をひらり。詞床の衆今日のお拂ひ者いかう遲うござるの。わしや大坂から迎ひに來た。地來るまで髮を借りませうとフシ待つ間程なくざわ〳〵〳〵。そりや科人ぢやと見る人も十が九つ歪んだ世に。直なる道を引かれ來るは兵太夫が情にて。助かる恩と頼みの詞。本フシ身にしみ〴〵と忘られず。地我が營みの生洲の魚。フシ沖に出でたる心地なり。地警固の役目は其日の當番。御法の如く囚人が繩解かせ。詞コリヤサ團七。詳しくは屋敷にて介松主計。玉嶋兵太夫兩人申渡さるゝ通り。去年九月十三日。御家中大鳥佐賀右衛門が家來に手を負ふせ。雙方ともに牢舍の所。手疵は癒えて相手は牢死。其故死罪を御赦免なされ。和泉堺をお構ひなさる。ありがたう存じ奉れと。地言渡す事言ひ仕舞ひオクリすぐ様。ヘ屋敷へフシ歸らるゝ。地後見送つて團七は故郷の方を伏拜み。詞アヽ忝い。佐賀右衛門が中間づれの。下手人に取らるゝかと思へば無念で口惜かつた。兵太夫様お禮は申さぬ。其代り磯之丞殿身の上。地命にかへても微塵さら〳〵御難儀はさせませぬと。ひとり呟く後から團七。々々と呼んだはどこ。イヤ床からと。ずつと出るはヤア三ぶ殿。詞でも珍しい息災にござつたの。ヲヽテヤ。おりや大坂から堺へ通ふ。わりや堺から大坂へ通ふ。商賣は違うても心は變らぬ懇意。了簡強い汝があゝした事。よく〳〵聞かれぬ事があつてと思うて。扨案じたは出かした〳〵。必ず恥ぢやと思ふなよ。江戸見ぬと牢へ入らぬとは男の中ぢやないといふ。今朝から嘆衆も坊主めも。連立つて迎ひに來て待つて居た。エちやつと顏見せてやりやぢやが。テモ長い月代。ムウ臭い着物。ぢやな。着替一つ持て來た。幸ひな此床で月代剃つて明神様へもお禮

申せ。おりや昆布屋へ行て落着かそ。アそりや大い世話でやした。貴様見ぬ中にきつう珠數ぢやの〳〵。サア今はとんとこれ。腹が立つても南無阿彌陀。笑ひ〳〵、も南無阿彌陀。念佛講で忙がしい賴母子がはやる。扨と序に。汝が贔屓の片岡仁左衞門。扨當つた。類見世へ持越して今に日向丸をしてゐるわ。コレ〳〵こちらの辻札。竹本義太夫曾根崎の心中で打破つたの。マア一日見に行けやい。イヤこんな事いや日が暮れるが。一ついはにやならぬ事あるわい。おかたが話で詳しう聞いた。礒之丞殿にたつた今逢うた故。一所に昆布屋へやつて置いた。ソリヤわしが大事の人。サア〳〵〳〵其譯も聞いて居るてや〳〵。とかく昆布屋でゆるりと話そ。地おりや先へ行て居ると風呂敷包手に渡し。詞中にや錢も入れてある。月代剃つて早うおぢや。コレ床の衆一つしてやつて。地賴みまするとぢ氣を付けてフシ内と新家へ別れ行く。地我故にいとし男の身の難儀。聞く悲しさの跡追うて大坂へと計りあてどなく。走り躓き琴浦は痞を撫でて。詞アヽ爰は何所ぢやほんに住吉樣。礒樣と連立つて難波屋へもよう來たが。地もしやあそこにぢやあるまいかと。見返る後に憎い奴。佐賀右衞門が爰へ來る見付けられたら捉へをろ。どこへ隱れうフシ間もあらせず。詞アコリヤ〳〵見付けたぞ逃げまい〳〵。お鯛茶屋からよう拔けそをやつたなア。俺がいふ事何と聞くぞ。元來貴樣には此佐賀右衞門が行て居たを。アノ礒めが身請して。お鯛茶屋の箱入。指もさゝせず賞翫しをる。そこで我等が幇間を持ち。獄道者に拵へ立て。勘當させた骨折も皆そ樣から起る事。風來人に心が殘ると。仕舞のはては嵩田へ曝され。情所を犬や烏がヲ思ひ出すも身が顫ふ。まだ其上にひよつとすると。男は助つて女は死損。そんな危ない事せうよりさらりと氣を變へ。サアまあ難波屋で地祝言の盃せうとフシ手を取れば。詞エヽ嫌らしい聞きとむない。コレ爰をマア放さんせと。もがく程猶しつかと握り。詞ハテびんしやんしても此大鳥が掴んでからは放さぬ〳〵。エヽ憎てらしいあれエ。〳〵。ハテはしたない聲が高い。高うても私や嫌ぢや〳〵。厭であらうが如何であるが。連れて行んで女房にすると。地合點せぬ者無理無體。引摺る意地張る床の前。ハテおぢやいのと引立てる。佐賀右衞門が利腕ぐつと暖簾ごし捻上ぐればアイタヽ。詞こりやどいつぢや何ひろぐ。イヤ何もせぬ俺でえすと。地ずつと出でたる剃立の糸鬢頭冑月代。詞ヤア汝や今日牢から出をつた。ヲヽ驚くまいへヽヽ。團七でえすわいな。さ

つきにから出來まするよ。れつきとした侍が女童を摑まへて。マヽ此手を放してやらうてやと。地拳痛めて突退くれば。イヤ詞汝いらざる所へ出しやばつて。邪魔ひろぐか何とすると。地いうても相手にならばこそ。詞こな樣があの。お鯛茶屋に居やしやつた琴浦樣ぢやの。シテ礒之丞樣に逢はんしたか。いゝやか。さうしてマア供はどこに居るぞ。地イヽエ誰もないわいなと。話の半へ騙し打。團七二つと斬付くるを引つぱづして ッシ翻斗打たせ。詞ハテ大膽な。そんな事ぢやさかいに。あんな惡魔が魅入りたがる。コレ私は礒樣を世話にする。團七といふ者で。エイそんならお前がおかち樣のお連合かえ。地アイ〳〵。挨拶と刀のあしらひ兩方を。受けつ答へつ又切る腕。柄と拳を一握り。詞ムウそんならおまへ此方の嗅。アイ知つて居りますとも。是はしたりと踏みのめし。ワリヤマアどこでは脊骨に膝。サイナア。お鯛茶屋へお迎ひにござんしてナ。始めて逢うて間もなく。礒樣も私故に。コレ氣遣しよまい。礒樣もつい其所にぢや。そこにとはどれ何所にエ。何處はツイそこの。コレ耳おこした。コレナア何と嬉しかろが。サヽちやつと早う行かしやんせ。地早う〳〵と礒之丞が。在所を囁き敎へられ ッシいそ〳〵として急ぎ行く。地ヤアあの女郎やる事ならぬと跳返して駈け行くを。首筋摑んで是はいな。詞コレ東側ぢやぞへ。此時宜必ずいふまいぞ。三ぶといふ者が居る程に。よう賴んで置かしやんせえと。地底の底迄氣を付けて。世話やく際に刀を鞘。納めた思案か佐賀右衞門。 ッシ飛ぶが如くに立歸る。地とは知らずお侍。もう去にやらいでと振返り。詞これはしたり。何所へ失せた。てつきり新家の香嗅いで。先へはよもや廻るまい。地とはいへ道が氣づかひな。宮へはいつでも參らるゝと。心は急いて行く跡からおゝい。〳〵〳〵。詞ハテ呼ぶのにこな男。地待つて貰うと三人づれ。中に二人は以前の駕籠舁。福袍布子のッシ懷手。詞ムウ俺に待てとは何ぞ用か。ハテ用がなうて呼ぼかいの。こつぱよなまよそろ〳〵と仕懸けやい〳〵。汝等でいかざ助けてやろ。地其間に拔きさいた髭拔かうと。床の床几に上足打ち。煙草入から出す鐵もッシなんぼう太き詮索なり。地いがみと早う見て取る團七。詞コリヤ出入でもする氣がなア。いらぬ事ぢやおけやい。イヤおくまいわい。名は言はいでも賴まれたと言や合點ぢやあろ。ハテ高が先きの女中貰ひに來た。口手間いらずと請取ろかい。ムウ聞えたが。そんな事いはぬものぢや。いはぬものとは。ハテサ渡すまいと言うた時に

や。ハ、、、どうもなるまいがな。コレ
これで貰ふ。〳〵わい。此腕で。こつば
の權。なまの八が受取るわい。イヤ此奴
が避けて通せば方圖がない。もうきかぬ
ぞよ〳〵。やきかぬというて如何しやる。
地イヤかう〳〵すると右左。ッシばたり
〳〵と蹴倒せば。詞イヤこいつ脚出した
ぞ。疊んでしまへ合點ぢやと。地床に凭
せし開帳札。手々に提げ〳〵て。滅多無
性に擲きかゝれば身を躱して掻摑み。引
つたくつたる後よりこつば微塵に打付く
るを。挽いだる札にて打落され。怯む所
を續打にばた〳〵〳〵。數も回向も二萬
日。弓矢八幡壺井の札。こらへぬ我武者
に打据ゑられ。二人ははふ〳〵片息に。
後を賴むと云捨てゝッシ命から〳〵逃げ
て行く。地見てゐた奴は大膽者。髭拔きし
まひ鑓を納め。詞へ、、、テモ弱い奴等
ぢや。あれでも人に賴まれるぢや迄。と
いうて退けても居られまい。俺賴んだが
無理ぢやない。ドリヤ地出て逢はうとの
つし〳〵。詞團七ちよと下に居て貰ひま
せうわい。同じ棒組賴むに退かず。一寸
も後へは寄らぬ一寸德兵衞が。ちよつと
マアへ、、、かうして見ようかいと。
地帶の前側ぢつと取る。詞ホ、、、こりや
また身があつて面白いわい。そんなら指
詰斯うせうかい。ムウさう仕やりや。コ
レ。ヤかうする。ムウかうする。イヤお
りやかうする。地イヤかうするわと打つ
手。止むる手右左。片手にりんとッシ尻ひ
つからげ。地出入花さく折も折。餘り遲
さに新家から。迎ひにおかちが唯一人。來
ればうたてや又喧嘩か。コレもう了簡さ
つしやれといふをもきかぬ摑合ひ。打つ
つ打たれつ止めても踏飛すやら蹴飛すや
ら。止めぬ仕樣も雙び立つ辻札取つて二
人が中へ。横に仆した機轉の枷。止まる夫
止まらぬ。相手の布子見知ある顏はヤア。
詞汝や此中の乞食め下れ。此方の人に何
で手向ひ非人めが。人でなしめと地叱ら
れて詞コリヤお家樣でござりますかと。
地誤り入つた顏付で。ッシ出入の腰は。
折れにけり。詞コリヤ女房。俺やすんど
合點がいかぬ。彼奴どうして見知つて居
る。見知つて居いで何とせう。短うひへ
ば磯之丞樣。お鯛茶屋からお歸りなされ
ぬ其時の思ひ付。お遊びなさる濱先で。
非人の喧嘩身の上話。こいらを賴んでい
はしたがお耳へ留つてお歸り。お袋樣の
お悅び。其御褒美にあの布子。まだ其上
にお金もあり。それから止めた其形ぢや
な。ムウそんなら重々憎い奴。玉嶋の御
恩を著て。磯之丞殿に仇をする。佐賀右
衞門が尻持つ恩知らずの畜生め。もう赦
さぬと飛びかゝれば地飛びしさつてアヽ
待つた〳〵。詞其磯之丞殿といふは備州

出のお侍。玉嶋兵太夫殿の御子息か。ハア知らなんだ〳〵。此德兵衛も備中の玉嶋生れ。少しの科で追拂はれ。國を出た時殘して置いた女房へ釣つてもお主。俺が爲にも親方筋。其思はく琴浦殿に。横戀慕する佐賀右衛門に賴まれた。傍輩の尻持つたは大きな間違。達引く所か俺も俱々 地お世話さして下されと。ほつくり折れる吉野尺。一寸德兵衛が一分の フシ立初とこそ知られけり。 地國七始終をとつくと聞き。 詞緣につるれば遠の物と。こりや珍しい出合ぢやな。其詞違はずば。何ぞ慥な固をせうわい。ヲそりや何なりと望み次第。コレお内儀。此辻札の紳を見さしやれ。曾根崎心中の德兵衛が。生玉で叩かれて恥面かいて居る所。其德兵衛の看板で。此德兵衛が出入を留め。かう打明けて融合うたは。明神の引合せ。エイ忝い〳〵したが。俺やちつとの間も薦被つたで。煩さがつて下さんなヤ。したが餘り物は喰はなんだぞい。あのお人のいはしやること。 地寺へ行た折聞きやんした。百人一首の天智天皇様も乞食の相があつた故。木の丸殿にござつたけな。浮沈はある習ひと會釋に國七心付き。 詞女房共。この二人の衆は昆布屋にか。サイナ三ぶ様のいはしやるはな。身の所へ戻りがけ。掛人二人連で行んだら氣に入るまい。今夜は此方へ連れて往んで。女中一人は引請けう。磯之丞様はゆく〳〵は。大事ない奉公でもさせましたらよからうと。 地市松と四人連先へ往んでとござんしたわいの。 詞ヲヽそりや慥々。慥な序に固はどうする。ヲヽ腕ひかうか。血を呑まうか。イヤ〳〵腕ひいたとて如何したとて。コレ肝心の爰が据らにや役に立たぬ。かわが性根見据ゑた故。固の印渡さうかい。何なりとも請取らう。 地コリヤ是を渡そと肌襦袢の袖引 フシ切つて差出し。 詞コリヤ是は國七が身に付けた片袖。磯之丞殿を世話にする。片腕にする證據の袖。とつくりと請取れよ。ヲヽ面白い。互に心底包まず隱さぬ德兵衛が。證據も又かうちぎつて渡すは。磯之丞殿を袖にせぬといふ印。どんな事があらうとも。御難儀になる事なりやそでないといひぬく證據。サア請取れ。サア請取れ。ヲヽ請取つた。〳〵と。 地互に取替へ手に通し。 詞俺が此袖かう肩に引きかけて世話したらなう德兵衛。ヲヽ俺もかう引きかけりや。ヲヽ氣遣は微塵もない。俺も大坂へすぐに出よう。そんならばサア連立たう。サアいかう〳〵と。 地裏表なき氣の廣袖。固はしやんと住吉の。亡者の袖よりたしかな袖。引連れてこそ 三重へいそぎ行く